

発電所を中心に円を描くと・・・

発電利用に供する木質バイオマスの証明のためのガイドライン(林野庁)より

問1- 5. 木質バイオマスの未利用木材の調達価格は高すぎて、過伐が進むのではないか。

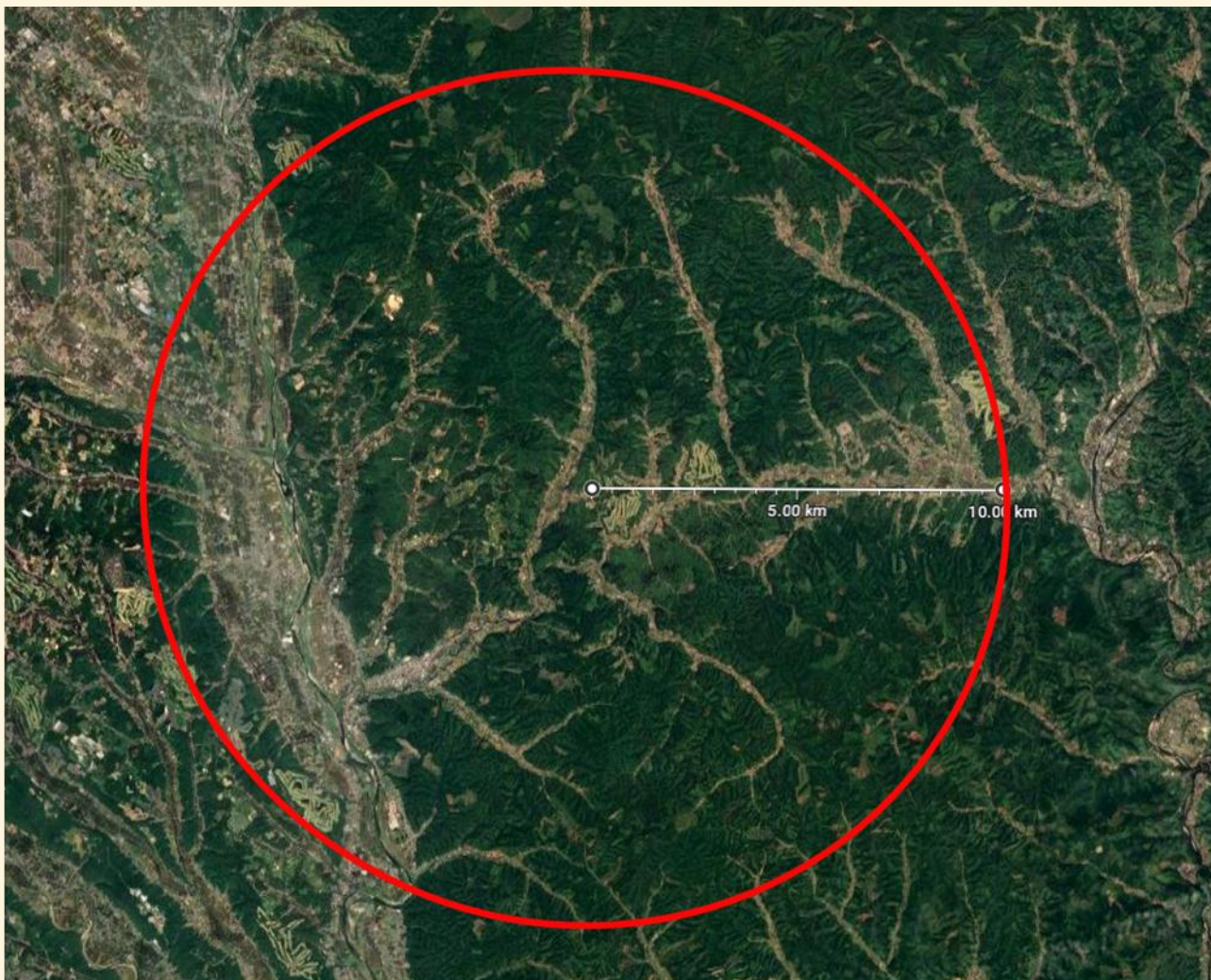
低質材の発電用価格が上がったとしても、その利用が進むという以上の現象（例えば、製材用の価格を上回る等）は見込まれません。

また、森林を適切に管理していくため、高い調達価格区分には森林経営計画等の対象森林由来の木質バイオマスを対象としているところであり、これらにより、「山が禿げる」ような過度な伐採にはつながらないと考えています。

今後も、森林の持続性確保のため様々な手立てを講じていくこととしていますが、今回の制度により山村地域に経済効果を生じさせていくことが極めて重要と考えています。

FIT制度が創設され、森林資源を活用した木質バイオマス発電が対象となった当初、山の伐採が進み、はげ山ばかりになるのではないかと、といった声がありました。林野庁が公表する「発電利用に供する木質バイオマスの証明のためのガイドライン」にも、上記のようなQ&Aが掲載されています。





那珂川バイオマス発電所を中心に、半径10kmの円を描いてみました。
国道・県道が通る箇所や、ゴルフ場などを除いた大部分が森林であり、「デカーレ
ひとくちメモ」で充実する森林資源の状況を整理してきたとおり、実際にたくさん
の資源に囲まれていることが良く分かります。
これらの資源は、ガソリンをかけて遠くへ運搬するのではなく、地元でこそ活用し
森林資源の地産地消というあるべき姿を取り戻せば最良だと思われま



1.2.1 海外の取り組みなどの背景

(1) バイオマスエネルギーの持続可能性の概念整理

木質バイオマスのエネルギー利用は、再生可能エネルギーの一つであり、気候変動対策上も重要な役割を果たすと言われている。しかし、それは全て「持続可能な利用が実現すれば」という条件付きで成立するものである。したがって、バイオマス発電事業者としても「持続可能性」という概念についての理解を深めておく必要がある。

そもそも持続可能性という概念は、燃料材を供給するために、16世紀にドイツの林学者が提唱したものだと言われている。また、伝統的バイオマス利用(薪炭利用)が中心だった、20世紀半ばまでの日本においては、はげ山が当たり前の景観で、水害も頻発していたと言われる。

写真は、第二次世界大戦直後に、荒廃した山地において緑化を進める国民運動のために始められた第一回植樹祭の写真である。現在では想像することも難しいかもしれないが、当時の人口規模・経済水準で、バイオマスエネルギーを「持続的ではない」方法で利用したことの結果であった。



図-1-2-1.第1回「植樹行事ならびに国土緑化大会」会場の様子(山梨県)¹

先人が残してくれた森林資源は充実期を迎え、その利用を待っている状況です。上記のような「はげ山」の時代に戻らないよう、伐って・植えて・育てる、循環利用の流れをきちんと作り、持続可能性を確保することが重要と考えています。